

5月



園だより

平成27年4月27日
佛教大学附属幼稚園

ぼくを探しに

園長 藤堂俊英

鯉のぼりが眼下に新緑を見ながら伸び伸びと泳いでいる姿を仰いでいると、子どもたちの健やかな成長を願う「子どもの日」が5月にあることがうなずけます。

もう30年ほど前のことですが、京都市内の看護専門学校に出講していた時のことです。その日は「いのちが脈打ち輝く仕組み」というテーマを、文学・哲学・宗教学などの材料を使って話したところ、講義が終わるなり一人の学生さんが「今日の話にぴったりの絵本があります」と感想を述べてくれました。まだ読んだことのない書名を聞いたので、「読んでみたいなあ」と言ったところ、次の週に持ってきてくれました。それが大人も読むベストセラー絵本『ぼくを探しに』でした。作者はアメリカの詩人、音楽家、漫画家、児童文学作家など、さまざまな肩書をもつシルヴァスタインです。『おおきな木』(原題は『与える木』)の作者でもある彼の風貌は、ひげづらの屈強なカウボーイといった感じで、写真を見る限りとても絵本作家とは思えません。

『ぼくを探しに』は女流作家倉橋由美子さんの翻訳で、原題は『見失ったかけら』となっています。丸いボールのような主人公のぼくには、実は欠けている所があります。それであまり速く転がることができません。この世界の何処かにあるかも知れない、ぼくの見失ったかけら(ミッシング・ピース)を探し出すことが出来れば幸せになれる、そう思っ**て**ぼくは旅に出るのです。速く転がることが出来ないおかげで、蝶もとまりに来てくれる、ミズとも話することができる、花のすてきな香りをかぐこともできる。大切なぼくを探しにの旅なのに、なぜか楽しくて自然と鼻歌が出てくるのです。

旅の途中、焦り過ぎて強引にぼくの見失ったかけらと勘違いして相手から叱られたりしながらも、ある日とうとうぼくにぴったりのかけらに出会うのです。ぼくは喜び勇んでミッシング・ピースと合体し転がり始めるのですが、スピードが出過ぎてしまい歌も歌えない、蝶ともミズとも花とも話が出来なくなってしまうのです。欠けている所がないぼくになればハッピーになれると思ったのに、実はそうではなかった。それを悟ったとき、「なるほどつまり、そういうわけだったのか」という言葉が、ぼくの口から出てくるのです。

本当の幸せというのは、他人が持っている、他国が持っているものよりも一つでも多く所有する、その結果などにあるのではなく、多くの人びと、多くの国々との出会いを大切に**する**、その歩みの旅にあることをこの絵本は教えています。

4月のつぶやき

晴天に恵まれたある日、園庭に出てピカピカのじょうろをみつけた3歳のAちゃん。チューリップを指差して、「お花にお水をあげたいの。」と保育者に伝えにきました。保育者と一緒にじょうろに水をたくさん入れて、プランターのチューリップにお水をあげました。保育者が「きれいに咲いてね。」とつぶやくと、Aちゃんも「きれいにさいてね」と花に話しかけます。保育者が、「お花、もうお水でおなががいっぱいだって！」と言うと、Aちゃんは「あっちのお花もお水欲しいって言ってるよ。」と他のプランターを指差しました。大人の言葉を聞き、花に思いを寄せ自分の思いも言葉にしようとする3歳児の柔軟な姿をみて、大人の発する言葉の大切さを感じました。

